

強震 WIN32 フォーマット

Data format of K-NET02 strong-motion seismograph (Kyoshin-WIN32 format)

功刀 卓 [1]; 青井 真 [1]; 中村 洋光 [1]; 藤原 広行 [1]; 安達 繁樹 [1]; 森川 信之 [1]

Takashi Kunugi[1]; Shin Aoi[1]; Hiromitsu Nakamura[1]; Hiroyuki Fujiwara[1]; Shigeki Adachi[1]; Nobuyuki Morikawa[1]

[1] 防災科研

[1] NIED

防災科学技術研究所が運用する全国強震観測網 (K-NET) では、データ公開フォーマットとして、テキストベースの K-NET フォーマットを採用しているが、強震計内部では機器独自の形式でデータ保存を行っている。平成 16 年より運用を開始した新型 K-NET 強震計 (K-NET02、K-NET02A) では、強震 WIN32 フォーマットと呼ばれる形式を採用している。このフォーマットは東京大学地震研究所の開発した WIN フォーマットをベースにした大規模観測網用のデータフォーマットである WIN32 フォーマット (防災科学技術研究所 Hi-net 用に開発) を基に、トリガー観測が主体である強震観測網向けの拡張を行ったものである。本発表では、強震 WIN32 フォーマットの概要を紹介する。強震 WIN32 フォーマットは、総務省消防庁の「次世代震度情報ネットワークのあり方検討会」最終報告書 (平成 18 年 3 月) において、新型 K-NET 強震計が使用している WIN32 に準じるフォーマットとされているものである。

トリガー観測が主体である強震観測では、強震計内部でトリガーデータが生成されたと同時に機器設定情報をデータファイルに付加することが必要とされる。このために、強震 WIN32 フォーマットは、波形データ (いわゆる秒ブロック) 以外の情報を収めることができる情報ブロックというものを持つ。情報ブロックは削除することが可能であり、強震 WIN32 フォーマットから WIN/WIN32 フォーマットへの変換は容易である。

強震 WIN32 フォーマットを用いれば、電文形式の震度情報や GPS 受信状態等の機器ステータス情報もデータファイル中に格納できる。機関独自の情報を格納することも可能であり、強震観測データ流通の円滑化に資することが期待される。